



お話を伺った高校教頭・太田晃介先生(写真中央)、進路指導主任・郭山植先生(同右)、広報主任・上床敦さん(同左)。

国際バカロレアを活用した公設民営校の立ち上げ
世界を視野に大阪を担う人材を育てる学校を
生徒と共につくり上げていく

大阪を担う人材の育成に
新しい形態で挑む

2019年4月、地球的な視野に立

ち、地域社会と国際社会の平和と発展に貢献する人材の育成を掲げ、大阪市立水都国際中学・高校が開校した。大阪府が国家戦略特区プロジェクトとして立ち上げた、全国初となる、公設民営の学校だ。市の方針に基づいて、指定管理法人に選定された大阪YMCAが学校運営を担い、世界120の国と地域で活動するYMCAのネットワークを活かした先進的なグローバル教育の実践を目指す。

「幅広い生徒に門戸を開く公立の公益性をもちながら、民間が培ってきたノウハウや実績を組み合わせて、新しい学校をつくってきたい」。そう語るのは、開校準備から参画している太田晃介教頭だ。教員は同法人が採用し、海外出身者が約4割を占める。「本校が目指す教育や学校づくりに魅力を感じ、何かから挑戦したいことがあって自ら手

を挙げた意欲的な先生ばかり」と広報主任・上床敦さん。そんな熱意ある多彩なプロフィールのメンバーが集まって、新しい学校が動き始めた。

生徒会や校則は
理念に基づき生徒が作る

目指す人材の育成に向けて、学校理念に掲げるのはENCOURAGE・ENGAGE・EMPOWERという「3つのE」だ(図1)。これをベースに現在、教員と生徒が共に学校づくりに取り組んでいる。従来の学校が備える要素を最初から整えることは敢えてせず、開校時点では校則、生徒会、部活動、校歌などがない状態だった。

「目指すのは、すべて用意して『こうしなさい』と生徒に与えるのではなく、生徒の『こうしたい』から始まる学校。生徒一人ひとりが社会に出たとき自己決定して生きていけるよう、失敗してもいいから、生徒が『3つのE』をもって自ら考え、決断、決定するプロセスを踏ませたいと考えています」(太田教頭)

図1 水都国際中学・高校の学校理念

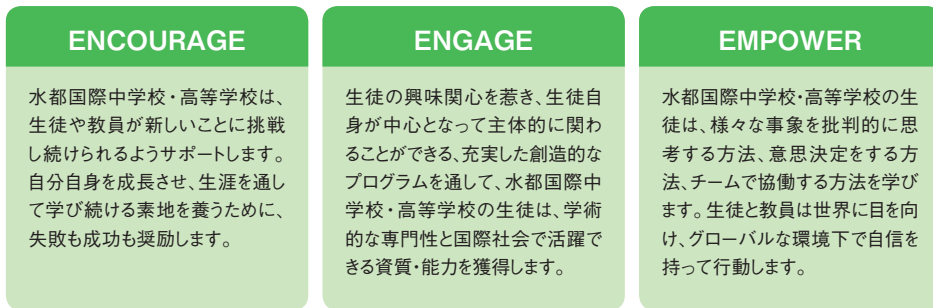
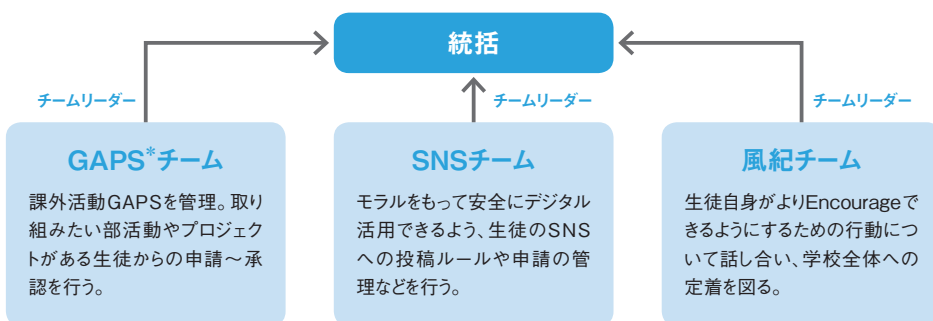


図2 生徒が作った生徒会の組織



*GAPS:Global Action Project in Suito



英語、数学、理科、グローバル 이슈探究の授業は、英語を使って行う。

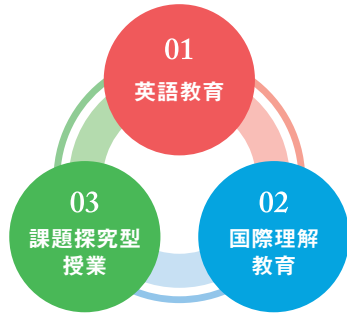


授業には、ペアやグループでの協働学習、課題探究型の学びを積極的に導入。

図3 3つの教育の柱

『21世紀型スキルを身につける』

英語教育に重点を置いた教育活動



01 英語教育

02 国際理解教育

03 課題探究型授業

自ら課題を発見し解決することを目的とした課題探究型授業の実施

自国の伝統や文化に根ざした国際理解教育に重点を置いた教育活動

例えば生徒会は、一般的な生徒会の組織形態に沿って役職に人を当てはめるのではなく、生徒が自分たちに必要な内容・業務を話し合い、目的を明確化したうえで、チーム制という形態により独自の組織を構築した。「より水都らしい学校を目指して、今までにない学校をつくろう。すべての生徒が安心して学校生活を送れるようにしよう」というミッションの下、GAPS(課外活動)、SNS、風紀に関する3つのチームをつかって運営している(図2)。

カリキュラムでは「英語教育」「国際理解教育」「課題探究型授業」の3つの柱を重視し、その効果的な実践のために国際バカロレア(IB)の教育プログラムを取り入れている(図3)。高校ではグローバル探究科という専門学科を設置しており、2学年から文系重視のグローバルコミュニケーションコース、理系

海外大学進学も視野に 先進的なグローバル教育を実施

「教員にとっては、細かいルールを決めたほうが楽です。しかし、大人がやっているのに子どもだけ許されないというのはおかしい。ルールを作るときは、教員も生徒も全員が守るものにすべきだと考えています」(太田教頭)

「前例のない状態から、多様な意見の生徒と教員の間で立ってリーダーシップを発揮して何かを形作っていくのは大変なこと。生徒は苦労しながらも、一生懸命取り組んでいます」(太田教頭)

また、社会で必要となるマナーや規範については学校から伝えているが、いわゆる「校則」は現在もない。生徒の髪の色やスタイルはさまざままで、携帯電話も教室に持ち込む。

また、多文化共生社会の実現に向けた国際理解教育を行う独自の専門科目「グローバルイシュー探究」を設置。ネイティブ教員が海外での実践を基にプログラム設計し、英語を使って授業を行う。課外では、世界中の若者が集まるカンファレンスへの生徒派遣や、海外大学からのインターン学生との交流など、世界に視野を広げる機会の充実を図っている。

同校の部活動にあたるGAPSも、生徒の手で立ち上げてきた。取り組みたいことがある生徒が申請、プレゼンを行い、それを生徒会が安全性、活動場所、期間、費用などを確認したうえで活動を開始するシステムで、現在では30以上のGAPSが存在している。

このような自由な環境で、さまざま

自分の意見を主張し いきいき学ぶ生徒たち

「どのコースの生徒にも、偏差値基準で身近なところから進路を選ぶのではなく、世界を視野に入れて自分なりの道を切り拓いてほしい。その第一段階として、多様な選択肢を伝えることが重要だと考えています」(進路指導主任 郭山植先生)

そんななか、一期生には海外大学進学を目指す生徒も少なくない。

「例えば体育の授業中は帽子をかぶらないといった暗黙のルールに対しても、合理的な理由がないと思えば、『なぜですか?』と疑問の声を上げることがよくあります。生徒には、将来自立してたくましく生きてほしい。そのためには、言われたことをそのままやるのではなく、物事を批判的に見て、自分の意見を言うことが大切です。臆せず自分を出せる気概のある生徒が育ってきているなど、頼もしく感じています」(郭先生)

「本校の特徴は、特定コースだけでなく、全コースにIB教育を取り入れている点。全生徒が『IB英語』や『TOK(知の理論)』を履修し、『IB歴史』や『IB数学』などのIB科目も選択可能です。課外活動もIB教育の一環に位置付け、生徒が主体的に活動できるようにしています」(上床さん)

また、多文化共生社会の実現に向けた国際理解教育を行う独自の専門科目「グローバルイシュー探究」を設置。ネイティブ教員が海外での実践を基にプログラム設計し、英語を使って授業を行う。課外では、世界中の若者が集まるカンファレンスへの生徒派遣や、海外大学からのインターン学生との交流など、世界に視野を広げる機会の充実を図っている。

「本校のグローバルサイエンスコース、IB資格取得を目指す国際バカロレアコースに分かれて学ぶ。」

「本校の特徴は、特定コースだけでなく、全コースにIB教育を取り入れている点。全生徒が『IB英語』や『TOK(知の理論)』を履修し、『IB歴史』や『IB数学』などのIB科目も選択可能です。課外活動もIB教育の一環に位置付け、生徒が主体的に活動できるようにしています」(上床さん)

「非認知スキル獲得のためにどんな取組を行っているか」と、太田教頭からは次々に新たなテーマがあふれてくる。同校の挑戦はまだ始まったばかりだ。

「すべて生徒が中心に動く学校が理想。それを許容できる学校システムをどう作っていくかが、我々教員の役割です」(太田教頭)

開校2年目の今、「定期考査のみに偏重しない学習評価にしていきたい」

「例えは体育の授業中は帽子をかぶらないといった暗黙のルールに対しても、合理的な理由がないと思えば、『なぜですか?』と疑問の声を上げることがよくあります。生徒には、将来自立してたくましく生きてほしい。そのためには、言われたことをそのままやるのではなく、物事を批判的に見て、自分の意見を言うことが大切です。臆せず自分を出せる気概のある生徒が育ってきているなど、頼もしく感じています」(郭先生)

「例えは体育の授業中は帽子をかぶらないといった暗黙のルールに対しても、合理的な理由がないと思えば、『なぜですか?』と疑問の声を上げることがよくあります。生徒には、将来自立してたくましく生きてほしい。そのためには、言われたことをそのままやるのではなく、物事を批判的に見て、自分の意見を言うことが大切です。臆せず自分を出せる気概のある生徒が育ってきているなど、頼もしく感じています」(郭先生)

「例えは体育の授業中は帽子をかぶらないといった暗黙のルールに対しても、合理的な理由がないと思えば、『なぜですか?』と疑問の声を上げることがよくあります。生徒には、将来自立してたくましく生きてほしい。そのためには、言われたことをそのままやるのではなく、物事を批判的に見て、自分の意見を言うことが大切です。臆せず自分を出せる気概のある生徒が育ってきているなど、頼もしく感じています」(郭先生)